

詩

金子みすゞ

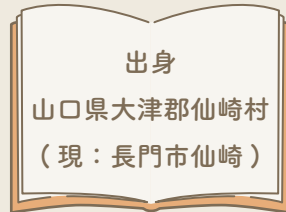
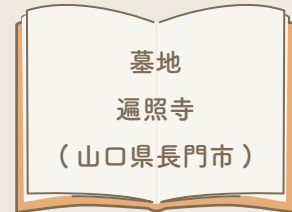
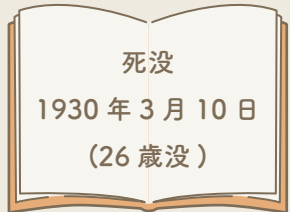
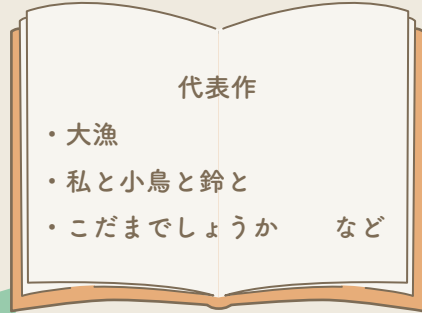
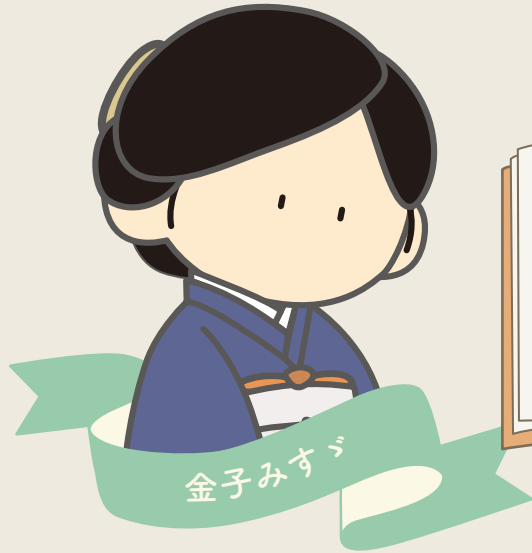
詩とは

自然や人事などから受ける

感興、感動を、

リズムをもつ言語形式で

表現したものである。



彼女の生涯



1923年（大正12年）、雑誌『赤い鳥』創刊から始まった日本の童謡運動は、最盛期をむかえていた。『金の船』（のちの『金の星』）『童話』と雑誌が次々と誕生し、北原白秋、野口雨情、西條八十がそれぞれの雑誌で競い、若い詩人たちを育てていた。

同年、彼女は「金子みすゞ」のペンネームで『童話』『婦人倶楽部』『婦人画報』『金の星』に投稿した。作品は9月号の4誌全てに掲載され、以降みすゞは次々と作品を投稿した。雑誌『童話』を中心に60編の作品を発表し、『童話』においては、推薦16編、入選24編、佳作2編の計42編が掲載された。西條八十は「どこかふつくりした温かい情味が謡全体を包んでゐる。この感じはちやうどあの英国のクリスティナ・ロセッティ女史のそれと同じだ。」とたたえた。

みすゞはまたたく間に、投稿詩人たちのあこがれの星となっていた。

1926（大正15）年、童謡詩人会編『日本童謡集一九二六年版』に「大漁」「お魚」が掲載。みすゞは、一流の詩人の集まる童謡詩人会に入会をゆるされた。

童謡詩人会の会員は西條八十、泉鏡花、北原白秋、島崎藤村、野口雨情、三木露風、若山牧水など。女性は与謝野晶子と金子みすゞの二人だけだった。

みすゞの評価は高まったが、文学のわからない夫はみすゞに、童謡を書くことと、投稿仲間との文通を禁じた。また同じ頃、みすゞは病気で体調をくずしていった。みすゞは作品を3冊の童謡集に清書し、その後は創作することはなかった。みすゞの心の支えは、娘ふさえ（1926年11月誕生）の成長を見守ることだった。

クリスティナ・ロセッティ女史



クリスティーナ・ジョージナ・ロセッティ
(1830年12月5日～1894年12月29日)
ヴィクトリア朝を代表するイギリスの女性詩人の一人。
敬虔主義的な作風による作品を残した。

1927(昭和2)年、西條八十編『日本童謡集(上級用)小学生全集第48巻』および1928(昭和3)年、光風館編輯所著『作文新編巻1』に「お魚」が収載される。

1929(昭和4)、年東亜学芸協会編『全日本詩集』には「繭とお墓」(『愛誦』1927(昭和2)年1月号が初出)が載る。みすゞは「美しい町」「空のかあさま」「さみしい王女」と題した3冊の童謡集を二組制作し西條八十と正祐(実弟、当時上山雅輔の名前で文藝春秋社の編集者をしていた)にそれぞれ託した。

1930(昭和5)年、病気が悪化し、生活もままならない状況のみすゞは、離婚を決意し夫と別居。みすゞの願いは、ふさえを手元におきたいということだけだった。しかし、親権が父親にしか認められない時代、夫はふさえを連れにいくと手紙をよこした。みすゞは、命がけの決断をする。3月10日、みすゞは服毒自殺を遂げ、享年28(数え年)、自ら26年の短い生涯を閉じた。夫あての遺書には、「ふさえを心豊かに育てたい。だから母ミチにあずけてほしい」とあり、正祐あての一通は、「さうらば、我等の選手、勇ましく往け」と結ばれていたそう。

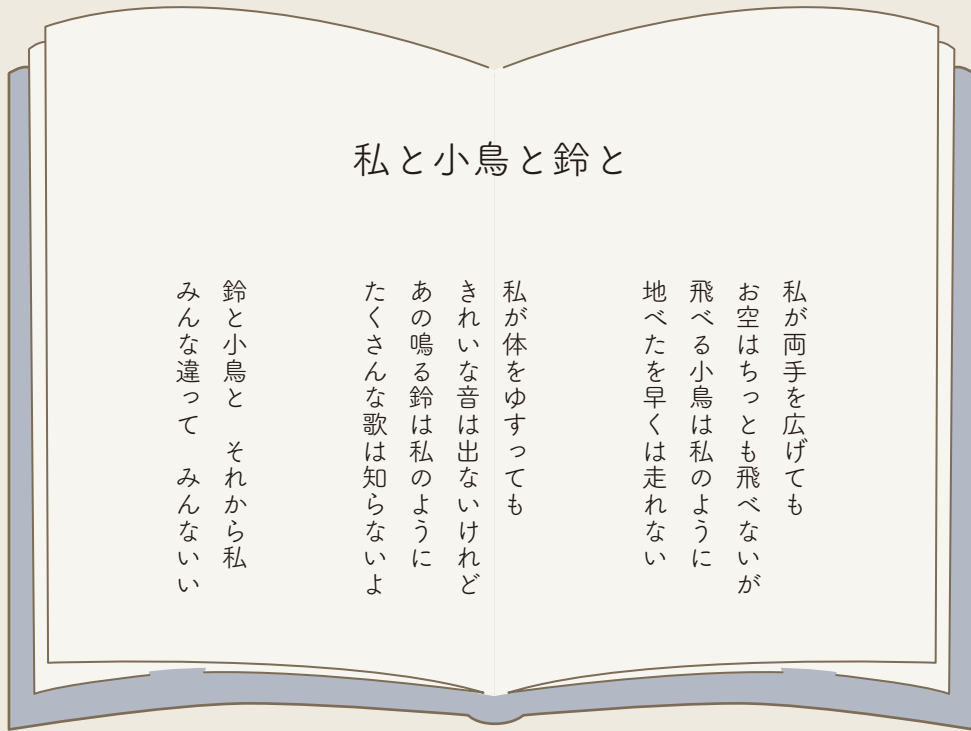
しかし、戦後、巽聖歌、与田準一、佐藤義美といったみすゞの同時代の投稿詩人たちが活躍しはじめると、かれらは自分のかかわった童謡の本のなかに、みすゞを紹介した。

金子みすゞを童謡の希望の光として、決して忘れることはなかった。

金子みすゞ、本名金子テルは、ふるさと仙崎の遍照寺に、父庄之助とともにねむっている。娘ふさえは、みすゞがいのちをかけて願ったように、ミチの養女となり、心豊かに育てられた。

正祐は、みすゞが亡くなる前に、3冊の童謡集を託された。正祐は東京でシナリオライターをめざし、上山雅輔の名前で仕事をしながら、みすゞの童謡集を出版したいという願いももちつづけていた。しかし、1931(昭和6)年、文芸雑誌『燭台』に寄せた文章のなかで、「既に童謡そのものがジャーナリズムから完全に取残された」といい、出版はむずかしいと考えるようになっていた。もうひと組の童謡集をわたされた師・西條八十も、1931年に雑誌『蛭人形』にみすゞに会ったときの印象を「下ノ関の一夜」として発表、また1935年には『少女倶楽部』で詩を数編紹介するが、詩集をつくることはできなかった。

やがて戦争の色が濃くなるにつれ、人々の自由はうばわれ、みすゞの話題も出なくなっていくた。



私と小鳥と鈴と

私が両手を広げても
お空はちっとも飛べないが
飛べる小鳥は私のように
地べたを早くは走れない

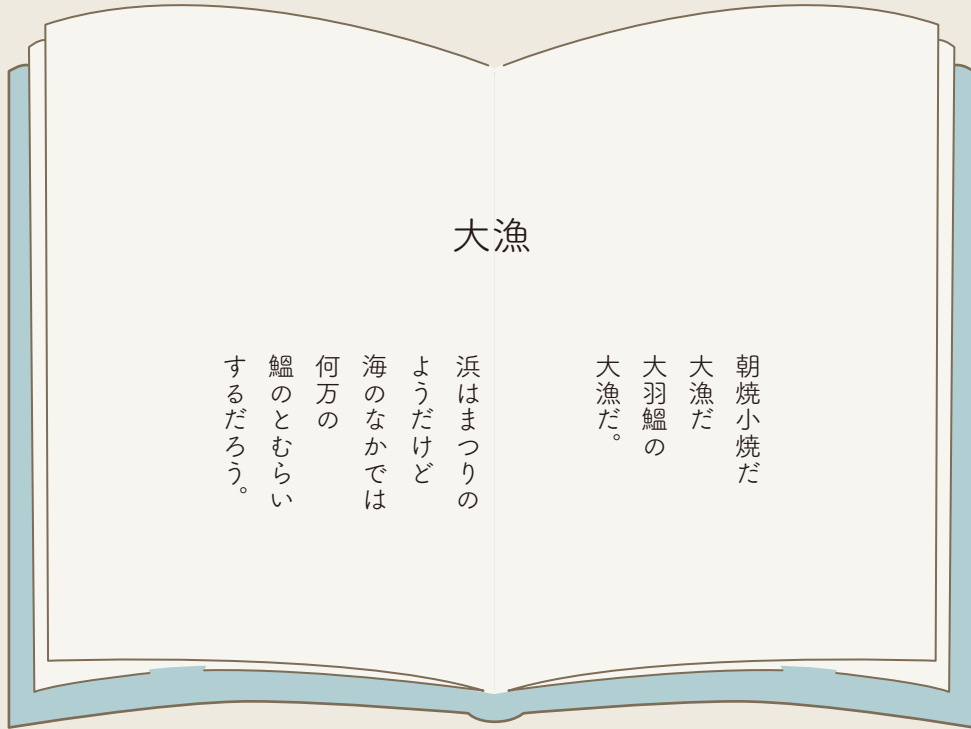
私が体をゆすつても
きれいな音は出ないけれど
あの鳴る鈴は私のように
たくさんな歌は知らないよ

鈴と小鳥と それから私
みんな違って みんないい

「金子みすゞ童謡全集」(JULA 出版局)

どんなものも、それぞれ違いがあるけれど、
それがまたいいのだという主張が感じられる。
みすゞは人間はもちろん、小さな生き物の小鳥や
それに鈴のようなものにまで、
たとえ一つでも良いところ持っていると言っている。





大漁

朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鰻の
大漁だ。
浜はまつりの
ようだけど
海のなかでは
何万の
鰻のとむらい
するだろう。

「金子みすゞ童謡全集」(JULA 出版局)

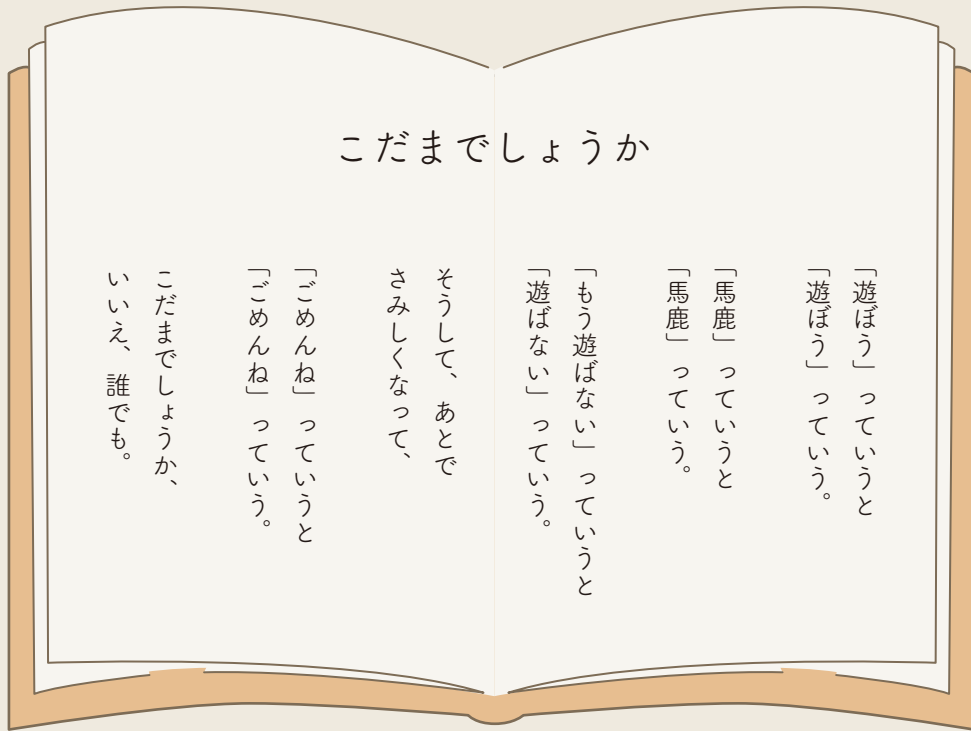


人間のよろこび

海の中の悲しみ

自分中心、人間中心の視点を大胆にひっくり返してくれる、
短いながらも深く心に残る詩である。

「世の中のすべてのことは表裏一体である」という真理を
分かりやすく伝えている。



こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。
「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。
「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。
そうして、あとで
さみしくなって、
「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。
こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

「金子みすゞ童謡全集」(JULA 出版局)



いろいろな人から発せられた言葉や思いに、
こだまのように返していくのは、すべての人なのだという
金子みすゞの思いが込められた言葉だと考えられる。

馬
立
里
美